

前報(昭和68年、第39回大会)では、女子の正装である唐衣裳について、着装の外観的な構成と技法を比較検討して発表したが、今回は、これら唐衣裳の変遷において、最も大きな違いと云えろ「裳」の構成について考察する。

平安時代の優雅な宮廷生活の中で作り上げられた装束は、室町時代以降に起きた多くの戦乱によって衰退した。その後、江戸時代に入って再興された初期の「掛帯形式」と、長い間の研究によって平安の古式にもどされた「引き裳形式」の二つに關して、いくつかの実物資料と、衣紋道高倉家に書き残されている調進目録や寸法控などの古文書を調査する機会を得たので、その結果を通じ、形式の違いによって変化する着装形態について検討してみた。

「掛帯形式」の裳については、地質は穀織を用い、描き絵の文様と掛帯の刺繍に三つの段階が見られる。これらは高倉家の調進控と一致しており、それぞれに着用者の身分が記録されているが、この事から、位によって決められている事が窺うけられる。又、この形式の着装形態は、掛帯を肩にかけて前で結ぶ。重さのバランスをとる為には丈は短く、下には衿縷裳が重ねられている。

「引き裳形式」のものは、地質が固地綾の穀織で、多くは、桐・竹・鳳凰の摺絵となっている。そして古いものには、掛帯形式の残存と思われる部分も見られ、着装形態は袷を着装した腰に小腰(掛帯)を結ぶつけて、長く後に引いている。